

領域「表現」から教科「音楽」へ

— わらべうた「ひらいたひらいた」を一例として —

鈴木 慎一郎

はじめに

本稿では、領域「表現」と教科「音楽」のそれぞれの特徴と相違を踏まえ、小学校第1学年の音楽教科書に見られる幼児教育との関係性の特徴を概観することを目的とする。

無藤隆は「最も本質的な幼小の連携は、カリキュラムの水準でのつながりを作ることである」と指摘する¹。また、無藤はカリキュラム作成の方法として「幼稚園の教育課程を上に伸ばしていく発想」と「小学校の教科を下に下ろしていくこと」を挙げる²。

音楽教育学の視点で幼小連携を取り上げた研究としては、北野幸子・三村真弓・吉富功修（以下、北野ら、と略記）がある³。北野らは、実際に汎用できる教育プログラムや授業をつくるための教材開発といった「移行プログラムの具体的な開発」を今後の課題として指摘する⁴。しかしながら、この研究は小学校、幼稚園教員や保育士等に対するインタビュー調査やアンケート調査の質的分析を通じた研究方法を採っているため、現行の音楽教科書の分析は行われていない。

ところで、細田淳子は次のように述べる⁵。

保育者には小学校の音楽の教科書をたまには見てほしいと思う。1年生の教科書に載っている曲はどのような曲なのか。幼稚園であたりまえのようにうたっている「まっかな秋」は5年生の教科書に載っていることを知ってほしい。知っているだけで選曲の方法が変わり、あまり難しい歌ばかりを選ばなくなるのではないかと思う。

このように今後の幼小連携を考慮した移行プログラムを開発する上で、現行の音楽教科書が有している特徴や課題を明確にすることは重要であると思われる。そこで本稿では、「小1プロブレム」の現象との関連から、小学校第1学年の音楽教科書を対象を絞り、考察したい。

1. 幼小連携の概観

(1) 先行事例の概観

著書という形で幼小連携の研究成果を発表した実践事例として、東京都中央区立有馬幼稚園・小学校⁶、鳴門教育大学附属幼稚園・小学校⁷、お茶の水女子大学附属幼稚園・小学校⁸等が挙げられる⁹。また、『初等教育資料』平成18年2月号には、東京都新宿区立四谷第三幼稚園・新宿区立四谷第三小学校、広島市立安東幼稚園・広島市立安東小学校、大阪府教育委員会の指導事例が紹介されている¹⁰。その他、表1は、2007年現在、幼小連携に取り組んでいる研究開発学校を一覧にしたものである。

表1 幼小連携に取り組んでいる研究開発学校一覧

年度	学校名	研究開発課題
2005（平成17）～ 2007（平成19） 年度指定校	国立大学法人お茶の水女子大学 附属中学校・附属小学校・ 附属幼稚園	幼稚園・小学校・中学校12年間の学びの適時性と 連続性を考えた連携型一貫カリキュラムの研究開 発
	奈良県大和郡山市立治道小学 校・治道幼稚園	幼稚園・小学校接続期における系統性を重視した 教育課程の編成と指導方法・指導体制の工夫・改 善及び幼稚園からの楽しい英語学習についての研 究開発
	広島県北広島町立八幡幼稚園・ 八幡小学校・雄鹿原小学校・芸 北幼稚園・芸北小学校・雲月小 学校・美和小学校・芸北中学校・ 広島県立加計高等学校（芸北分 校）	小学校段階から「ことばの技能科」「英語科」を新 設した場合の幼稚園・小学校・中学校・高等学校 13年間の一貫・系統性ある教育課程についての研 究開発
2007（平成19） 年度延長 指定校	大阪府千早赤阪村立こごせ幼稚 園・赤坂小学校・千早小学校・ 多聞小学校・小吹台小学校・村 立中学校	幼稚園・小学校・中学校の11年間において、英語 活動・情報活動の系統化したカリキュラムのもと、 国際化・情報化に対応したコミュニケーション能 力の増進を図る指導内容・指導方法の研究開発
2006（平成18）～ 2008（平成20） 年度指定校	国立大学法人奈良女子大学 附属幼稚園・附属小学校・ 附属中等教育学校	幼・小・中等教育15年間にわたり、事物認識とそ の表現形成の徹底化を通して、独創的で「ねばり 強い」思考能力を育成する教育課程の研究開発
2007（平成19）～ 2009（平成21） 年度指定校	神奈川県南足柄市立北足柄小学 校・南足柄小学校・福沢小学校・ 岡本小学校・岩原小学校・向田 小学校・北足柄中学校・南足柄 中学校・岡本中学校・足柄台中 学校・北幼稚園・南足柄幼稚園・ 福沢幼稚園・岡本幼稚園・むつ み幼稚園	夢と希望に向け、粘り強く自分の道を切り開く子 どもの育成を旨とした、幼稚園・小学校・中学校 の一貫教育を推進する教育課程の開発

出典 http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/kenkyu/index.htmから作成。

佐々木晃・木下光二は、幼稚園と小学校の独自性について表2のように示す¹¹。教科教育の視点でみると、幼稚園と小学校で大きく異なる点としては、教科書の有無の点である。

表2 幼稚園と小学校の独自性

幼稚園	小学校
ゆるやかな時間の流れ 心の成長の見とり 呼応 呼吸 空気の流れ 評価 子ども 保育	集団学習の中での知識や 文化としての伝達 内容 時間割 教科書 評価 教師 授業
学んだことが内容になる	内容をいかに教えるか

出典 『授業をデザインする「技」』2006年，141頁。

佐々木は、「幼小連携を促進するための評価項目」（試案）を作成し、「連携に関する項目」として、以下の6点を掲げる¹²。当然のことながら、下記の項目は、音楽に焦点を当てた場合についても該当する。

- ① 幼小互いの指導内容について関心をもっているか
- ② 交流活動などを行っているか
- ③ 合同保育／授業などを具体的な指導計画に位置付けているか
- ④ 互いの幼児，児童に関する記録をはじめとする情報を提供し合っているか
- ⑤ 保護者に対して幼小連携の成果などについて説明しているか
- ⑥ 全教職員に対して幼小連携の成果などについて説明し協力を促しているか

(2) 「幼稚園教育要領」と「小学校学習指導要領」

「幼稚園教育要領」では、小学校との連携について以下のように規定されている¹³。

幼稚園においては、幼稚園教育が、小学校以降の生活や学習の基盤の育成につながることに配慮し、幼児期にふさわしい生活を通して、創造的な思考や主体的な生活態度などの基盤を培うようにすること。

一方、「小学校学習指導要領」では以下の通りである¹⁴。

開かれた学校づくりを進めるため、地域や学校の実態等に応じ、家庭や地域の人々の協力を得るなど家庭や地域社会との連携を深めること。また、小学校間や幼稚園、中学校、盲学校、聾学校及び養護学校などとの間の連携や交流を図るとともに、障害のある幼児児童生徒や高齢者などとの交流の機会を設けること。

表3は、「幼稚園教育要領」と「小学校学習指導要領」の第1学年・第2学年の規定から音楽に関する記載を一覧にしたものである。

「ねらい・目標」の項を見ると、「楽しむ」「楽しさ」がキーワードになっている¹⁵。幼稚園では、「楽しむ」ことを最終的な目標にしているのに対し、小学校では「楽しさ」は目的格に位置付けられている。また、小学校では「基礎的な表現の能力を育て」ることも明記されている。

「内容」の項については、小学校では音楽に関する細かな規定がなされ、「できるようにする」「身に付けるようにする」「感じ取れるようにする」といった内容の習得の徹底を促す文末表記となっている。歌唱を一例として比較すると、幼稚園では「音楽に親しみ、歌を歌ったり、簡単なリズム楽器を使ったりする楽しさを味わう」と規定されているのみである。それに対し小学校では「歌い方や楽器の演奏の仕方を身に付けるようにする」と技能面での習得が求められている。

表3 「幼稚園教育要領」と「小学校学習指導要領」

	領域「表現」	教科「音楽」
ねらい・目標	(1)いろいろなものの美しさなどに対する豊かな感性をもつ。 (2)感じたことや考えたことを自分なりに表現して楽しむ。 (3)生活の中でイメージを豊かにし、様々な表現を楽しむ。	(1)楽しい音楽活動を通して、音楽に対する興味・関心をもち、音楽経験を生かして生活を明るく潤いのあるものにする態度と習慣を育てる。 (2)リズムに重点を置いた活動を通して、基礎的な表現の能力を育て、音楽表現の楽しさに気付くようにする。 (3)音楽の楽しさを感じ取って聴き、様々な音楽に親しむようにする。
内容	(1)生活の中で様々な音、色、形、手触り、動きなどに気付いたり、楽しんだりする。 (2)生活の中で美しいものや心を動かす出来事に触れ、イメージを豊かにする。 (3)様々な出来事の中で、感動したことを伝え合う楽しさを味わう。 (4)感じたこと、考えたことなどを音や動きなどで表現したり、自由にかいたり、つくったりする。 (5)いろいろな素材に親しみ、工夫して遊ぶ。 (6)音楽に親しみ、歌を歌ったり、簡単なリズム楽器を使ったりする楽しさを味わう。 (7)かいたり、つくったりすることを楽しみ、遊びに使ったり、飾ったりする。 (8)自分のイメージを動きや言葉などで表現したり、演じて遊んだりする楽しさを味わう。	A 表現 (1)音楽を聴いて演奏できるようにする。 (2)楽曲の気分や音楽を特徴付けている要素を感じ取って、工夫して表現できるようにする。 (3)歌い方や楽器の演奏の仕方を身に付けるようにする。 (4)音楽をつくって表現できるようにする。 (5)表現教材は次に示すものを取り扱う。(中略) ウ 共通教材 「うみ」(文部省唱歌) 「かたつむり」(文部省唱歌) 「日のまる」(文部省唱歌) 「ひらいたひらいた」(わらべうた) B 鑑賞 (1)音楽を聴いてそのよさや楽しさを感じ取れるようにする。 (2)鑑賞教材は次に示すものを取り扱う。(中略)

2. 音楽教科書

佐々木宏子は、国語、算数、図画工作の事例から「保育所や幼稚園での自由で主体的な子どもたちの遊び活動が、いかに小学校の教科教育と豊かで多彩な結びつきをもっているか」と言及する¹⁶。では、小学校音楽教科書においても遊びの要素が見られるのか否か¹⁷。

表4に示した通り、小学校音楽教科書は、教育芸術社、教育出版、東京書籍の3社によって発行されている。

表4 分析対象の音楽教科書

出版社	教科書名	著者	年
教育芸術社	小学生のおんがく1	畑中良輔, 黒沢吉徳, 小原光一, 石桁冬樹, 飯沼信義, 加賀清孝, 浦田健次郎	2004 (平成16) 年2月29日検定済 2006 (平成18) 年1月20日印刷 2006 (平成18) 年2月10日発行
教育出版	小学音楽 おんがくのおくりもの1	監修: 三善晃。編集・執筆: 伊藤俊彦, 伊野義博, 嘉手納洋子, 金谷昌治, 鎌田範政, 桑原啓郎, 阪本佳子, 竹内秀男, 千田薫, 坪能由紀子, 中島寿, 長島真人, 中山弘史, 新実徳英, 野村幸治, 橋本龍雄, 宮野モモ子, 村尾忠廣, 茂木一衛, 横沢源	2004 (平成16) 年2月29日検定済 2006 (平成18) 年12月10日印刷 2006 (平成18) 年1月20日発行
東京書籍	新編 あたらしいおんがく1	湯山昭, 熊木眞見子, 小島律子, 清水和, 田中安夫, 中村義朗, 西園芳信, 村井芳雄, 若松正司	2004 (平成16) 年2月29日検定済 2006 (平成18) 年1月20日印刷 2006 (平成18) 年2月10日発行

表5は教育芸術社、表6は教育出版、表7は東京書籍の第1学年の音楽教科書における題材名、課題を一覧にしたものである。また、共通教材については表8で示した。

各教科書の導入題材は、教育芸術社「うたでともだちをつくろう」、教育出版「うたともだち」、東京書籍「おんがくらんどへしゅっぱつ」とあり、歌が導入として用いられている。

表5 『小学生のおんがく1』教育芸術社

p.	題材名	課題
2	うたでともだちをつくろう	えのなかからうたをみつけてうたいましょう。
5		うたいながらなかよしになりましょう。
8		おんがくにあわせてみんなであるきましょう。
10	こころのうた	ひらいたひらいた
12	おんがくにあわせてあそぼう	てびょうしにあわせてあそびましょう。
14		おんがくにあわせてからだをうごかしましょう。
16	こころのうた	かたつむり
18		じゃんけんであそびましょう。
20		けんばであそびましょう。

22	こころのうた	うみ
24	リズムにのってあそぼう	おんがくにあわせてリズムをうったりおどったりしましょう。
26		うたのリズムであそびましょう。
28		たんとたたのリズムであそびましょう。
30		たんとたたのリズムでことばあそびをしましょう。
33	いいおとをみつけてあそぼう	どとそのおとをふきましょう。
34		すきなおとをふきましょう。
36		いろいろなおとにきをつけてききましょう。
38	こころのうた	ひのまる
40		きれいなおとでふきましょう。
42	ようすをおもいうかべよう	こねこのようすをおもいうかべながらききましょう。
44		おほしさまによびかけるようにうたいましょう。
46		ばめんのようすをおもいうかべながらうたいましょう。
48	みんなであわせよう	いろいろながっきのおとにきをつけてききましょう。
50		うたとがっきをあわせてえんそうしましょう。
52		きれいなおとでがっそうしましょう。
54		よびかけあつてうたいましょう。
56		みんなでこえをあわせてうたいましょう。

注 ゴシック体：「ひらいたひらいた」が掲載されている題材名，課題。
(表6, 表7についても同様)

表6 『小学音楽 おんがくのおくりもの1』教育出版

p.	題材名	課題
2	うたとともだち	どうぶつになってあそぼう
4		うたってわらってあそぼう
6		れっしゃになってあそぼう
8		おはなになってあそぼう
10		かたつむりになってあそぼう
12		たんうんのりずむであそぼう
14	こんにちはけんばんハーモニカ	
16	わくわくりずむ	とんたんのりずむであそぼう
18		とんたんたんのりずむであそぼう
20		りずむにのっておどろう
22	にっぽんのうたみんなのうた	うみ
24	なかよしどれみ	うたっておどってどれみとあそぼう
26		うたやがっきでどれみとあそぼう
28		どれみでうたおう
30	すてきなおと	すてきなおとをさがそう
32		すてきなおとをさがそう
34	あそびうためぐり	りずむにのってあそぼう
36		かけごえのりずむであそぼう
38	どんなようすかな	おほしさまにはなしかけるようにえんそうしよう
40		ようすをおもいうかべてきこう
42	みんなであわせて	うたでおいかけっこしよう
44		からだでおんがくをたのしもう

表7 『新編あたらしいおんがく1』東京書籍

P.	題材名	課題
3	おんがくらんどへしゅっぱつ	かもつれっしやになつてさあしゅっぱつ
6		おはなばたけでともだちとあそぼう
8		おんがくらんどでパーティーをしよう
10	りずむらんのたんけん	てをうってあそぼう
12		みんなでおどろう
14		おんがくしつをたんけんしよう
16	がっきらんのたんけん	けんばんハーモニカにちょうせん
18		どれみでふいてみよう
20		うたにあわせてみよう
22		いろいろながつきにちょうせんしよう
24		がっそうしてみよう
26	にっぽんのうたころのうた	うみ
28	からだでおんがく	うたいながらあそぼう
30		あそびかたをはつめいしよう
32		にっぽんのあそびうた
34	おととおとをあわせると	2つのがつきでばんそうしよう
36		たいこをいれてがっそうしよう
38	にっぽんのうたころのうた	あめふりくまのこ
40	おとのたんけん	おとをいれてあそぼう
42		おとをみつけてはっぴょうしよう
44	おんがくでおはなし	どんなおはなしかな
46		どうぶつになつてうたおう
48	たのしいおんがくかい	みんなでがっそうしよう
50		おんがくかいをひらこう

表8 第1学年 共通教材一覧

曲名	うみ (文部省唱歌)	かたつむり (文部省唱歌)	日のまる (文部省唱歌)	ひらいたひらいた (わらべうた)
作詞	林柳波		高野辰之	
作曲	井上武士		岡野貞一	
調	ト長調	ハ長調	ヘ長調	陽旋法 (律のテトラコルド)
拍子	3/4	2/4	2/4	2/4
小節	8	12	16	12

題材名、課題において「遊び」の用語が用いられているのを整理したものが図1である。

題材名については、東京書籍では「遊び」の用語が使用されていないのに対し、教育芸術社では33.3%使用されている。課題については、各社で「遊び」の用語が使用され、教育出版が54.5%と高い。

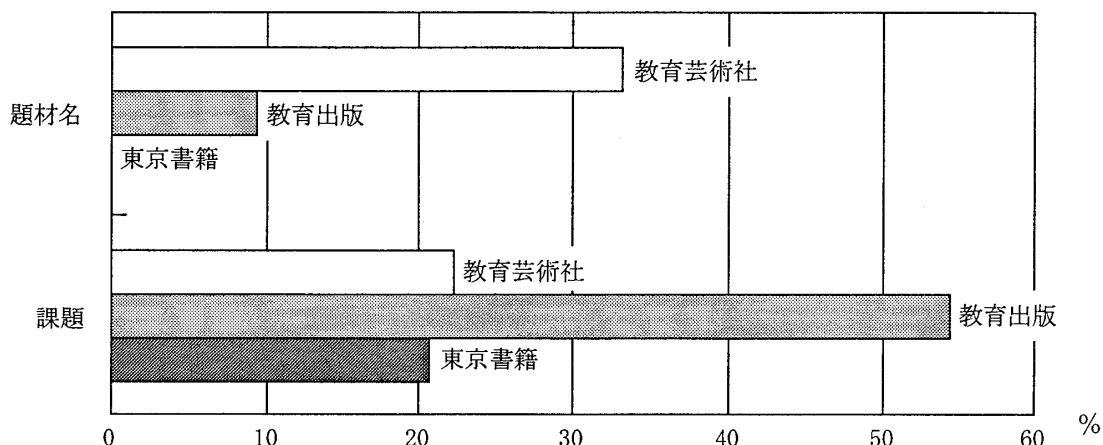


図1 題材名、課題における「遊び」の用語が占める割合

3. わらべうた「ひらいたひらいた」

(1) わらべうた「ひらいたひらいた」

紙幅の関係上、ここでは「遊び」との関連があり、幼児教育とも関係の深いわらべうた「ひらいたひらいた」を例に取り上げ、学習内容と方法について検討したい。共通教材¹⁸である「ひらいたひらいた」は、教育芸術社(表5)では「こころのうた」という題材名で愛唱歌として学習する方法が採られている。それに対し、教育出版(表6)では「おはなになってあそぼう」、東京書籍(表7)では「おはなばたけでともだちとあそぼう」とあるように、「遊び」が課題の中に明記されている。

町田嘉章・浅野建二によると、「開いた開いた」は、「江戸(東京)を中心に古くから行われた遊び唄で、元来、関東地方のものであるが、幼年唱歌集等に掲載されることによって、全国に普及した。明治の初年頃最も盛ん(以下、略)」と説明されている¹⁹。

また、金田一春彦・安西愛子は、「ヒライタヒライタ」について以下のように言及する²⁰。

『幼年唱歌』に珍しく入れられたわらべ歌。『幼年唱歌』でこれ以外に「わらべ歌」を採らなかったのは残念であった。ただし、この「ヒライタヒライタ」の旋律は、地方によってちがいが、東京を含めて関東西部から東海・東山道地方で歌っていた節に近いが、(以下略)。

その他、権藤敦子によると、1932(昭和7)年、50曲ものわらべうたを収録した『日本郷土童謡名曲集』が、坊田壽眞によって出版される²¹。そこでは「ひらいたひらいた」は「遊戯童謡 雑」と分類され、以下のように解説されている²²。

円く輪になり手をつないで、子供自身が一人一人蓮華の花びらとなり、「開いた 開いた…」 「荅んだ 荅んだ…」と歌ひながら、輪を大きくしたり或は小さくして遊ぶ遊戯で、関東地方だけではなく今では全国的に行はれてゐる。地方地方で曲にも歌詞にも多少変化がある。特に最後の「荅んだ」の曲は東京市内の子供だけでも種々に歌はれてゐる。

ちなみに、関庚燦によると、「ひらいたひらいた」は、朝鮮総督府が編纂した最初の音楽教科書である『新編唱歌集全』（1914年）の中に韓国語に翻訳され「ピオンネ ピオンネ」として所収されていた²³。

ところで、小泉文夫はわらべうたの性格として以下の5点を指摘する²⁴。

- ① 音階は大部分が、伝統的な民謡音階である。その音階は雅楽にも影響を与え、能・狂言の基礎になっている音階である。
- ② 同じ系統の歌でも、地域によって歌詞やメロディーが異なる。つまり、自発的創造性を持つ。
- ③ 悪口うたや早口言葉を除けば大部分が遊戯と結びついている。子どもの生活に密着している。
- ④ 古い歌の変形とともに、新しい戦後の歌が案外多い。わらべうたは決して古いものではなく、常に新しいものである。
- ⑤ 民謡音階でなくても、好きな歌を替えうたにして、わらべうたに作りなおす。ただし、その場合でも五音音階のほうが圧倒的に多い。

また、小泉はわらべうたを遊戯の形態（種類別、遊び方別）に基づき、「0となえうた、1絵かきうた、2おはじき・石けりなど、3おてだま・はねつきなど、4まりつき、5なわとび・ゴムなわ、6じゃんけん グー・チョキ・パーあそび、7お手あわせ、8からだあそび、9鬼あそび」に分類した²⁵。この方法によると、「ひらいたひらいた」は「8からだあそび」に分類される²⁶。

以上、「ひらいたひらいた」の特徴は次のように整理できる。

- ・陽旋法（律のテトラコルド）で構成され、教科書に掲載されている楽譜（譜例）における声域は e^1-d^2 。5歳頃の声域が $a-c^2$ とされているので²⁷、一部の子どもによっては d^2 の声が出しにくいことが予想される。4度下げ、 e^1 から始め最高音を a^1 に留めておく方が、声区変換点に引っかからない。
- ・「花」「蓮華の花」といった春を連想させる言葉が使用され、春の時期に学習するにふさわしい曲である。わらべうたでしばしば用いられる差別的な言葉も使用されていない。
- ・輪遊び歌であるので、コミュニケーションを深めるのにも最適である。

なお、わらべうたを幼小連携の視点で考察した先行研究としては、本間雅夫が挙げられる²⁸。本間は幼児に留まらず、小学生においてもわらべうた教育の重要性を主張している。しかし、この研究は音楽教育におけるわらべうた導入の変遷を概観したにすぎず、具体的な事例については取り上げられていない。

譜例 「ひらいたひらいた」



(2) わらべうたの主な先行事例の概観

最初に幼稚園におけるわらべうたの実践事例を考察した主な先行研究を概観したい。尾見敦子は、茨城県竜ヶ崎市にある竜ヶ崎みどり幼稚園の事例を取り上げ、荒井映子教諭（主任）の実践の特徴として以下の点を指摘している²⁹（以下、筆者要約）。

- ・わらべうたの課業は1週間に2回（午前）、1回の課業は15分から20分。
- ・課業は心地よいテンポで進行する。
- ・課業は、静から動へ、動から静へ非常によく構成されている。
- ・教師は、自然な発声、鮮明な発音で、子どもの声量を決して上回らず、少し高めの短い言葉で、「私メッセージ」で自分の要求をきちんと届ける。
- ・教師は、子どもたちと詩やわらべうたを共有する時間を心から楽しんでいる。

また、尾見は、集団遊びとしてのわらべうた遊びを「多面的で総合的な教育力を内在している」と評価する³⁰。

一方、小学校におけるわらべうたの主な実践事例としては、目黒稚子が挙げられる³¹。目黒は、第1学年を対象に「あそびうためぐり」という題材で会津とフィリピンのわらべうたを実践・考察している。

(3) 小学校の教師用指導書における「ひらいたひらいた」

前述の通り、小学校においては教科書の使用が義務付けられている。この点が幼小の音楽教育の方法の在り方に決定的な違いを生む。

権藤は、わらべうたの教材化の危険性について次のように指摘する³²。

わらべうたや子守歌が教科書に載り、全国で用いられることによって、本来、地域ごとに個性豊かな歌詞と旋律で歌われてきたものが、一つに固定される。これは、戦後の音楽教科書にも引き継がれていった。国家主義と郷土研究の矛盾の一つの現れであり、教科書の強制力によってわらべうたの本質を教師に見えなくしていった要因となった。

この点については現行の「小学校学習指導要領」では以下のように記され、地方に伝承されている日本のうたを取り上げることが認められている³³。

歌唱教材については、共通教材のほか、長い間親しまれてきた唱歌、それぞれの地方に伝承されているわらべうたや民謡など日本のうたを取り上げようとする。

では、現行の教科書に掲載されている「ひらいたひらいた」は、どのように指導されているのだろうか。ここでは教育出版と東京書籍の教師用指導書に掲載されている指導例を取り上げ、小学校においてどのような授業がモデルとなっているかを検討したい(表9)。

「評価」に明確に記されているように、どちらも歌唱だけではなく、身体表現と関連が図られている点は共通している。しかし、歌の伝達方法として、教育出版では口伝えという古典的な方法が採られているのに対し、東京書籍では範唱CDが推奨されている。わらべうたという性格上、やはり教育出版の方法が望ましいだろう。遊び方については、各社とも一つの決められたものではなく、子どもの状況に応じた多様な遊びを認めている。

表9 教師用指導書における「ひらいたひらいた」

教育出版 教師用指導書	東京書籍 教師用指導書
<p>○「ひらいたひらいた」を歌いながら遊ぶ。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・歌を口伝えで教えながら、同時に遊び方も教える。 ・子どもの中で遊び方に違いがあれば、それぞれの遊び方を試す中で、クラスでの楽しい遊び方を共通理解する。 	<p>○範唱を聴いて歌詞唱する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・CDに合わせて歌い、歌を覚える。 ・手拍子を歌いながら歌う。 <p>○身体表現をしながら歌う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「歌いながらいろいろな遊びをしましょう」 <p><例></p> <ul style="list-style-type: none"> ・輪になって歩きながら歌う。 ・歌詞に合わせて輪を閉じたり開いたりする。 ・花が開いたり閉じたりする様子を立ったり座ったりして表現する。
<p><評価></p> <p>☆歌に合わせて自ら体を動かし、楽しく歌唱表現しようとしている。</p>	<p><評価></p> <p>☆拍の流れやフレーズのまとまりを感じ取って、それに合う身体表現を工夫している。</p>

(4) 学習試案

最後に学習試案を提示したい。無藤は幼児教育の成果を生かす小学校低学年教育として以下の点を指摘する³⁴。

- ・ 合科的・総合的活動をもっと展開すべきである。
- ・ 接続期という移行のための特別な活動を意識して導入してもよい。

また、お茶の水女子大学附属学校によると、幼・小・中連携における音楽のカリキュラムづくりのポイントとしては、以下の3点が挙げられている³⁵。

- ① わらべうたや音遊びなど五感を通して感じる経験を幼児期から積み重ねる。
- ② 公共性を意識した学習をデザインする。
- ③ 多様な他者との出会い・交流の場を設定する。

上記の成果に基づき、表10では小学校第1学年を対象としたわらべうたを題材に含んだ学習試案を構想する。

表10 春で遊ぼう

段階	教科領域	学習活動	教師の支援
つかむ	特活	幼稚園，保育所を卒園して，少し寂しいな。 小学校へ入学してうれしいな。 お互いの名前を知ろう。そして，遊ぼう。 友だちの名前をたくさん知ったよ。 名前を使って色々遊ぶね。 小学校ではどんなきまりがあるのかな。	<ul style="list-style-type: none"> ・ 名前を使った音楽遊びを行うことで，音楽遊びのおもしろさを体感できるようにする。 ・ 遊びや体験活動等で必要となる安全面での約束の大切さを徹底する。 ・ 校庭を散歩することで，春の植物や昆虫に気付くことができるようにする。
	道徳	クラスの約束をつくろう。守ろう。 事故はこわいな。 みんなでクラスの約束を守ろう。	
	生活	春を探そう。 チューリップが咲いているよ。 桜のピンク色もすてき。 ちょうちょも飛んでいるよ。	
深める	図工	春を描こう。 僕はチューリップをたくさんかきたい。 わたしは桜の花をかわいくかくわ。	<ul style="list-style-type: none"> ・ 自分で発見した春についてクレパスを使って絵に表現できるようにする。

広 げ る	音楽	<p>「ひらいたひらいた」を歌ってみよう。</p> <p>幼稚園で聴いたことがあるよ。 知らない歌だったけれども、すぐに歌えたよ。 「蓮華の花」とはハスの花なのだ。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・教師自ら歌うことで、新しい曲を子どもたちに伝える。 ・蓮華の花のイメージが持てるようにするために、写真を用意する。
	音楽	<p>「ひらいたひらいた」で歌って遊ぼう。</p> <p>体を使って歌うことで声を出すのが楽しいな。 遊び方を工夫できないかな。 歌と歩き方が合ってきたね。 他のわらべうたにはどんな遊びがあるかな。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・わらべうたで遊ぶおもしろさを伝えるとともに、音と体の表現の在り方について感覚的に感じるができるようにする。
	音楽	<p>地域の人からわらべうたを教えてもらおう。</p> <p>このわらべうた聴いたことがあるわ。 やってみると案外おもしろいね。 幼稚園や保育所のみんなにも知らせたいな。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・地域の人をゲストティーチャーとして迎え、地域のわらべうた遊びについて指導していただく。
	特活	<p>「ようこそ、小学校へ」</p> <p>一緒にわらべうたで遊ぼう。</p> <p>幼稚園や保育所の子たちも喜んでいたね。 また交流会をしたいね。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・近所の幼稚園、保育所の5歳児を招待し、わらべうた遊びを題材とした交流会を開催する。

おわりに

以上、幼小連携と音楽について、第1学年の音楽教科書の分析を通して概観した。教科書の有無によって指導法が大きく変わる。しかしながらこの溝をできる限り、なめらかにすることが求められている。本稿を通して第1学年の音楽教科書には、「遊び」の視点を考慮して編纂されていることが確認できた。また、音楽と他教科・他領域と合科的に構想したわらべうたを題材とした試案も立てた。今後はこの試案を実践し、様々な角度から検証していきたい。それと同時に、前述の権藤が指摘するわらべうたが教科書に掲載されることによって生じる弊害について、幼小連携の視点からもさらに検討する必要がある。

〔注〕

- 1 無藤隆「幼稚園教育と小学校教育をつなぐもの」お茶の水女子大学附属幼稚園・小学校『子どもの学びをつなぐ：幼稚園・小学校の教師で作った接続期カリキュラム』東洋館出版社、2006年、4頁。
- 2 無藤隆「幼小連携について考えておくべきこと」『幼年教育研究年報』26、広島大学教育学部附属幼年教育研究施設、2004年、1-9頁。
- 3 北野幸子・三村真弓・吉富功修「家庭・保育所・幼稚園・小学校連携の課題に関する一考察：質的分析を中心に」『福岡教育大学紀要』第55号、第5分冊、福岡教育大学、2006年、71-81頁。その他、三村真弓・吉富功修・北野幸子「音楽教育における保幼小

- 連携のための基礎的研究：音楽教育に関する意識調査を中心に」『中国四国教育学会教育学研究紀要』（CD-ROM版）第50巻，中国四国教育学会，2004年，267-272頁。
- 4 同上，79頁。
 - 5 細田淳子「子どもが楽しくうたうこととは」『子どもの文化』2006年6月号，第38巻6号通巻425号，財団法人文民教育協会子どもの文化研究所，19頁。
 - 6 東京都中央区立有馬幼稚園・小学校，秋田喜代美監修『幼小連携のカリキュラムづくりと実践事例 子どもが会う 教師がつなげる 幼小連携3年の成果』小学館，2002年。その他，汐見稔幸編『保育者と親のための学び&交流誌 エデュカーレ』2007 3月号，第18号，臨床育児・保育研究会，2007年，25-26頁でも紹介されている。
 - 7 佐々木宏子・鳴門教育大学附属幼稚園『なめらかな幼小の連携教育：その実践とモデルカリキュラム』チャイルド本社，2004年。佐々木晃・木下光二「異校種とつながる 単元計画をつくる：互いの学びや育ちを深める幼小連携の単元をデザインする」久野弘幸編『学力が身に付く授業の「技」第4巻 授業をデザインする「技」』ぎょうせい，2006年。
 - 8 お茶の水女子大学附属幼稚園・小学校，前掲書。
 - 9 関連する著書は以下の通り。岸本裕史・汐見稔幸・宍戸健夫『もうすぐ1年生，学力はどこまで必要か』大月書店，1992年。丸山美和子『小学校までにつけておきたい力と学童期への見通し』保育と子育て21，かもがわ出版，2005年。
 - 10 文部科学省教育課程課・幼児教育課編『初等教育資料』No.805平成18年2月号，東洋館出版社，2007年，20-37頁。
 - 11 佐々木・木下，前掲書，141頁。
 - 12 佐々木晃「幼小連携を促進するための評価項目」佐々木宏子・鳴門教育大学附属幼稚園『なめらかな幼小の連携教育：その実践とモデルカリキュラム』チャイルド本社，2004年，186-187頁。
 - 13 文部省『幼稚園教育要領解説』フレーベル館，1999年，172頁。
 - 14 文部省『小学校学習指導要領』1998年，5頁。なお，以下のように解説されている。「幼稚園や中学校との間で相互に幼児児童生徒の実態や指導の在り方などについて理解を深めることは，それぞれの学校段階の役割の基本を再確認することとなるとともに，広い視野に立って教育活動の改善充実を図っていく上で極めて有意義であり，幼児児童生徒に対する一貫性のある教育を相互に連携し協力し合って推進するという新たな発想や取組が期待される」（文部省『小学校学習指導要領解説 総則編』東京書籍，1999年，93頁）。
 - 15 奥忍『「コミュニケーション」を基盤にした音楽学習の開発研究』平成13・14年度科学研究費補助金研究成果報告書，2003年，5頁。
 - 16 佐々木宏子「教科の学びの萌芽に満ちた遊び」小田豊・青井倫子編『幼児教育の方法』

- 保育ライブラリ 保育の内容・方法を知る, 北大路書房, 2004年, 106頁。
- 17 関連する先行研究は以下の通り。斉藤百合子「音楽科における「遊び」から学習への発展についての一考察:デューイの「遊び」についての理論を手がかりに」『日本デューイ学会紀要』No.44, 日本デューイ学会, 2003年, 38-43頁。
 - 18 「ひらいたひらいた」は, 1977(昭和52)年以降の「小学校学習指導要領」において歌唱共通教材として位置付けられている(山本文茂「共通教材」日本音楽教育学会編『日本音楽教育事典』音楽之友社, 2004年, 319頁)。その他関連する研究は以下の通り。渋谷傳「<わらべうた>教育の目指したもの」『小学校音楽教育講座 第2巻 音楽教育の歴史』音楽之友社, 1983年, 134-142頁。
 - 19 町田嘉章・浅野建二編『わらべうた』岩波書店, 1962年, 222頁。なお、『教科適用 幼年唱歌』については, 以下の研究が詳しい。鳥音嘎・小楠智子・黒川たまみ・清水泰博・渡邊厚美「言文一致唱歌の成立・内容に関する一考察:『教科適用 幼年唱歌』『教科書準拠教科統合 尋常小学唱歌』の分析を通して」『音楽教育学研究論集』第5号, 東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科芸術系教育講座音楽教育学研究室, 2003年, 32-41頁。
 - 20 金田一春彦・安西愛子編『日本の唱歌(上) 明治篇』講談社, 1977年, 124頁。
 - 21 権藤敦子「昭和初期における郷土意識とわらべうた:坊田壽眞の業績とその時代背景を中心に」劉麟玉代表『近代音楽・歌謡の成立過程における国民性の問題』平成13・14年度科学研究費研究成果報告書, 2003年, 42頁。
 - 22 同上, 58頁。
 - 23 関庚燦「韓国の唱歌(2)」安田寛編『原典による近代唱歌集成—誕生・変遷・伝播—解説・論文・索引』ビクターエンタテインメント, 2000年, 136頁。
 - 24 小泉文夫『子どもの遊びとうた:わらべうたは生きている』草思社, 1986年, 209-210頁。
 - 25 小泉文夫編『わらべうたの研究』研究編, 稲葉印刷所, 1969年, 284頁。
 - 26 小泉文夫編『わらべうたの研究』楽譜編, 稲葉印刷所, 1969年, 204頁。
 - 27 米山文明『声と日本人』平凡社選書171, 平凡社, 1998年, 87頁。なお, 音名はドイツ表記に基づいている。
 - 28 本間雅夫「わらべうたを素材とする音楽教材:幼児から小学生へ」本間雅夫・鈴木敏朗『遊びと合唱・幼児から小学生へ わらべうたによる音楽教育』自由現代社, 1998年(2002年改訂), 86-92頁。
 - 29 尾見敦子「幼児教育におけるわらべうたの教育的意義」『川村学園女子大学研究紀要』第12巻第2号, 2001年, 69-92頁。
 - 30 同上, 87頁。
 - 31 目黒稚子「アイヌ民族の音楽文化学習」と「会津とフィリピンのわらべうた」の授

業実践から」『音楽教育実践ジャーナル』vol.4 no.1 (通巻7号), 日本音楽教育学会, 2006年, 48-52頁。その他, 目黒は以下の言及がある。伊藤明美・大島久子・小林衛己子・小林純子・目黒稚子・近藤信子・斉藤惇夫「座談会「わらべうた」を子どもたちに返すために 子どもたちは「わらべうた」がすき」近藤信子・柳生弦一郎『にほんのわらべうた③おてぶしてぶし』福音館書店, 2001年, 82-91頁。

- 32 権藤敦子「唱歌教育におけるわらべうた曲集の意味：教材化への視点を中心に」『音楽表現学』Vol. 3, 日本音楽表現学会, 2005年, 18頁。

なお, 嶋田由美は次のように指摘する。「学校教育を離れた子どもの実生活の場では地域により異なる「さくらさくら」の歌が存在していたにもかかわらず, 昭和16年には『うたのほん 下』において『箏曲集』の「櫻」の替え歌である「さくらさくら」が掲載され, 学校唱歌教材として扱われることになった(嶋田由美「戦後音楽教科書における「さくらさくら」の変遷：終結パターンの開始音の「レ」と「ミ」を巡って」『関西楽理研究XX』関西楽理研究会, 2003年, 85頁)。

- 33 以下のように解説されている。「わらべうたや民謡, 日本古謡は, 我が国の伝統的な音感覚に根ざした音楽であり, 歌唱共通教材として取り上げたものも, 古くから親しまれ, 比較的広い範囲の地域で歌われてきたものである。しかし, こうした日本のうたのもつよさや楽しさは, むしろそれぞれの土地において伝承され親しまれてきたものにこそ味わいのあるものが多い」(文部省『小学校学習指導要領解説 音楽編』教育芸術社, 1999年, 79-80頁)。

- 34 無藤隆「就学前教育と小学校教育との連携」文部科学省教育課程課・幼児教育課編『初等教育資料』No.805平成18年2月号, 東洋館出版社, 2007年, 13頁。

- 35 吉岡晶子・猪原和子・小宮幸夫「音楽 つながりを深めるミュージッキング」『協働して学びを生み出す子どもを育てる：幼・小・中12年間の学びの適時性と連続性を考えた連携型一貫カリキュラムの研究開発』お茶の水女子大学附属幼稚園・お茶の水女子大学附属小学校・お茶の水女子大学附属中学校・NPO法人児童教育研究会, 2007年, 83頁。

すずき しんいちろう (音楽教育学)